

令和3年度 東山会会報



名古屋大学工学部機械系学科同窓会 東山会 令和4年2月発行

【目次】

- 会長挨拶 昭和52年卒業 (第36回) 渡邊 激雄 会長 P1-2
- 定年・退職の先生のお言葉
昭和53年卒業 (第37回) 酒井 康彦 先生 P3-5
- 新任の先生の挨拶
永島 壯 准教授 P6
キムジョンヒョン 助教 P7
崔羿(CUI Yi) 助教 P8
平成20年卒業 (第67回) 竹内 大 助教 P9
- 昇任の先生の挨拶 奥田 裕之 准教授 P10

東山会 会長

渡邊 激雄 先生

昭和 52 年卒業(第 36 回)



会 長 挨拶

土屋前会長から、東山会会長のバトンを受け継ぐことになりました渡邊（旧姓：鵜飼）でございます。私のようなものが伝統ある東山会の会長を務めることになろうとは、全くの驚きでした。2年に一度の東山会の新年会は、同級生の故新美智秀教授と杯を交わして談笑するのが楽しみでした。新美先生から、「頼むぞ!」と言われたような気がします。微力ながら、先輩諸氏、理事、会員の皆さまのご支援とご協力をいただきながら、精一杯頑張ります。何卒、よろしくお願い申し上げます。

東山会は、1950年に機械系同窓会として発足し、現在まで70年を経て、会員も7200名を超えるまでになりました。国内外の企業、役所、大学、研究機関などで活躍される幅広い年代の方々によって構成される同窓会であります。東山キャンパスに豊田講堂があり、東山会に名誉会長の豊田章一郎さまがいらっしゃる。まさに、東山会は名古屋大学の同窓会の一丁目一番地といっても過言ではありません。

令和2年1月には、令和2年東山会総会・新年同窓会が、現役大学生・大学院生11名を含む131名の参加者を得て、名鉄ニューグランドホテルで開催されました。平成3年に現在の形の東山会新年同窓会第1回を開催してから、16回目でした。松尾清一 名古屋大学総長にご降臨をいただき、「激動する社会と大学：名古屋大学の挑戦」と題した特別講演を賜りました。松尾先生から、令和2年4月にスタートした国立大学法人東海国立大学機構に関してお話をいただき、未来に向かって発展する統合を表す方程式「名古屋大学×岐阜大学＝無限大」をご教示いただきました。

自動車産業におけるCASE（コネクティッド化、自動運転化、シェア/サービス化、電動化）や電力業界における発送電分離を行う電力システム改革が、「百年に一度」の変革として話題になりました。

世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症も、スペイン風邪以来のまさに「百年に一度」の出来事であり、様々な活動が制限されています。このような中、令和2年5月に予定されていましたが関東支部の総会、および、全学同窓会が10月に開催する「ホームカミングデー」に合わせて東山会が開催する「東山へ帰る日」も延期を余儀なくされました。「不要不急」という判断では、同窓会の優先度は必ずしも高くなく、会食時の談笑による感染が危惧される中で、活動が難しくなっています。しかしながら、生物の進化においても、環境に適したものが生き残ることが知られており、同窓会も現在の環境に適することが要求されます。同窓会活動は、一度、活動が休止すれば、元に戻すことが難しくなります。制約が多い中でも、オンラインであっても、可能なことは何でも実施していくことが重要と考えます。令和2年10月には、全学同窓会行事として、第16回ホームカミングデー「卒業生へ送る、名古屋大学の今」がWEB会議システムで開催され、大変好評でした。WEB会議システムも急速な進歩を遂げ、Remo Conferenceのように、仮想会議場にテーブルを多数設けて、人数制限内であれば、参加者はどのテーブルにも行って会話できるシステムもあります。学会のポスター発表や懇親会にも使用され始めています。オンラインの良さはインターネット環境のあるところであれば、世界中のどこからでも参加できることでしょう。東山会でも、関東支部—本部—関西支部を連携して、全国東山会懇談会のような形で、一度試してみたいものです。

東山会の母体である名古屋大学工学部機械系学科・大学院機械系専攻は、平成29年4月よりの改組に伴い、3年・4年時における、機械システム工学、電子機械工学、航空宇宙工学の3つのコース別教育が廃止され、同一の教育を受けた機械・航空宇宙工学科の卒業生として、令和2年3月に卒業。これに伴い、従来の機械系同窓会「東山会」、電子機械同窓会「伊吹会」、航空系同窓会「高翔会」の各同窓会で、将来に向けた同窓会の在り方の結論を近々に得ることが求められています。東山会にとっては、これもまさに、「百年に一度」の出来事でしょう。国立大学法人東海国立大学機構のように、各会の伝統を受け継ぎながらの発展的な統合が期待されます。

このような大役を務めさせていただくにあたり、個人力だけでは到底できないことばかりです。先輩諸氏、理事、会員の皆さまの多大なるご支援とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

名古屋大学名誉教授

酒井 康彦 先生

昭和 53 年卒業(第 37 回)



定年退職を迎えて思うこと

昨年（令和 3 年、2021 年）の 3 月末に名古屋大学工学研究科を定年退職いたしました。退職後 9 か月あまり経た昨年 12 月に渡邊激雄東山会会長様より広報担当理事の青山忠義先生を通じて「退職の先生のお言葉」の執筆依頼状を受けました。依頼状によると文字数の制限・フォーマット等は無いということでしたので、せっかくの機会ですので、多少長くなりますが、私の経歴も含めて私が常々思っていたことを本稿で書かせていただこうと思い筆を執りました。

私が機械工学のうち流体工学の奥深さに魅せられて、名古屋大学工学部機械学科「流体機械講座」（故古屋義正先生の研究室）の門を叩いたのは昭和 52 年（1977 年）4 月でした。その後、博士前期課程、後期課程を経て、昭和 58 年（1983 年）4 月から名古屋大学工学部助手として採用され、教養部図学教室での在籍期間（昭和 59 年（1984 年）4 月～昭和 63 年（1988 年）9 月末）を経て、定年退職に至るまで工学部・工学研究科で教育・研究に携わってまいりました。研究は大学院時代から中村育雄先生（現名古屋大学名誉教授）と宮田勝文先生（現山梨大学名誉教授）の薫陶を受け、一貫して主に「乱流拡散・混合現象の解明」に取り組んできました。

過去にこの東山会会報でも書かせていただいたことがありますが、私の教員・研究者生活を通じて、心のよりどころとしてきたものがあります。それは恩師中村先生から頂いた「知的人生に贈る—どう生きるかを考える書」（田中菊雄著、渡部昇一特別解説、三笠書房）という書物でした。重要な点は第 1 章に書かれている以下の人生出発の心得三カ条、すなわち

1. 健全な思想は人生の道標（みちしるべ）
2. 生産的な習慣を早いうちから身につけよ
3. 才能と環境にあわせた企画を

であります。これだけではこれらの意味を理解することは難しいですが、この本

の記述するところによると、「健全な思想」とは「努力すれば必ず報いられると信じる」ことであり、「生産的な習慣」とはつまるところ「整理整頓の習慣」であり、「才能と環境にあわせた企画を」立てるとは「無理な企画を立てるな」ということになります。いま思えば、第1条はよく引用される上杉鷹山や武田信玄の「為せば成る」の精神（もとは古代中国の書『書経』にある「弗爲胡成（為さずんばなんぞ成らん）」だとされているようです）に通じるものと思われます。第3条は、昨年のNHKの大河ドラマの主人公の渋沢栄一翁の「蟹穴主義」とほぼ同様の意味であろうと思います。第2条については、私はついに実現できなかったものですが、いつも心に留めていたものでした。

さて、私の教員・研究者時代を振り返ってみますと、名古屋大学には（自分自身が実感した）大きな変化が二度あったように思えます。それは平成5年(1993年)の教養部廃止（それに伴う情報文化学部の設置）と平成16年(2004年)の国立大学法人名古屋大学の設立だと思います。会員の皆様の中には教養部の廃止に伴う教育カリキュラムの変化を経験された方もおられると思いますが、この時から所謂「4年一貫教育」が導入され、工学部の教員も教養教育の一旦を担うようになりました。それまでは、工学部の教員は専門科目だけを教えておればよかったです。この時から、教養科目としての数学、物理学、基礎セミナーなどを受け持つようになりました。そのため工学部教員の授業負担が非常に大きくなってしまいました。一方、研究面では国立大学法人名古屋大学の設立が大きな変化をもたらしました。所謂、国立大学の「独法化」でした。私の学生時代や研究者としての駆け出しの時代は各研究室の研究費はかなり潤沢にあり、教員は自分の学術的興味に基づいて研究課題を選べたように思えます。ところが、この独法化に伴い、大学への交付金が徐々に削減され、大学の社会貢献が重要視されるようになりました。つまり、産学連携や国(各省庁)が打ち出す重点課題などの推進が前面に出され、教員は外部資金の獲得のために奔走しないといけなくなったのです。このような時代背景がありましたが、時代の流れに逆らわず、私は私なりに信念をもって研究室運営をしてきました。

研究室運営についての心構えは先の「人生出発の心得三カ条」を基礎にしました。具体的には研究室内の発表会(コロキウム)と大学院授業としてのセミナーを通じて教育研究を進めようと思いました。セミナーでは乱流に関する基礎的な書籍をしっかりと解説することに重きを置き、コロキウムでは学生諸君に自身の研究の進捗状況や関連論文の解説などをしてもらいました。学生諸君にとっては厳しい経験であったと思いますが、学生諸君とdiscussionが出来る時間は私にとっては、最も楽しい時間でもありました。数えてみれば、平成11年(1999年)に自分で研究室を運営するようになって以来、学部生133名、博士前期課程学生121名、博士後期課程学生16名の研究指導を行い、学術論文199編(和文論文96編、英文論文103編)を世に出すことが出来ました。これが多いか少ないかは読者のご判断にお任せしますが、これが私としては精一杯の教育・研究成果でした。

以上、僭越ながら、私の38年間に亘る教育者・研究者としての心構え、私を取り巻く環境の変化および研究室運営について簡単ではありますが記述させていただきました。結局は、「視之不見」(老子道德経 上篇 第14項)、未だ人生途上、

今後も自分の「微明なる道」を探していくことになろうかと思っております。今は、名古屋大学工学研究科を離れ同学国際機構という部署に移り、特任教授という立場で、主に留学生向けの夏季研修や発展途上国（具体的にはウズベキスタンのタシケント工科大学）の工学教育援助などの業務に携わっておりますが、現役時代と比べて勤務時間には余裕があり、暇を見つけて定年までにやり残した仕事を少しずつ片付けております。（今になって、人生出発の心得三カ条の内の第2条が出来ていなかったと後悔の念に駆られています。）

最後になりますが、私は常々、教育者・研究者としての心（魂）とはなんだろうか？私が後世に遺すことができるものとしては何があるであろうか？と問い続けてきましたが、それらについて思うことを述べたいと思います。まず、教育者・研究者としての心（魂）ですが、結局それは日本人の心の原点である「万葉集」の巻頭第一首（雄略天皇の御製）にあるように「優しい恋心！」であろうと思っています。つまり教育者としての心（魂）とは「人を育てることに恋をすること」であり、研究者としての心（魂）とは「自分に与えられたテーマに恋をすること」ではないでしょうか？ なにも武士道の象徴のように言われている“信念を通す強いところ”、所謂「大和魂」（吉田松陰の「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬともとどめおかまし大和魂、あるいは「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」）ではないように思うのです。一方、私が後世に遺すことができるものは何であろうかと問うた時、さしたる学術的貢献も出来なかった私としては、内村鑑三の明治27年夏期学校における講演「後世への最大遺物」で述べられているもの、すなわちそれは「アノ人はこの世に中に活きているあいだは真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのこと」を後世に遺せば望外の幸せと思う次第です。

定年退職を迎えて、東山会会員の皆様にお伝えしておきたい言葉があります。それは我が機械工学教室の泰斗、故古屋義正先生のお言葉として伝え聞いている

“人のまえを横切るな”

であります。まさに、これは日本人の持つ「道義心」、「徳」そのものを表したお言葉（岡潔、「春宵十話」、光文社文庫、p.88）と思います。

コロナ禍が治まらぬ不透明な世がまだしばらく続きそうですが、東山会同窓会の皆様のご幸福と東山会のご発展を切にお祈り申し上げて拙文の筆をおかせていただきます。

新任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
機械システム工学専攻
機械理工学講座
固体力学研究グループ

永島 壮 准教授



2021年4月1日付で機械システム工学専攻の固体力学研究グループ（奥村大先生主宰）に准教授として着任しました永島壮と申します。慶應義塾大学で博士号を取得し、韓国科学技術研究院と米国プリンストン大学でポストドク研究を実施した後、2017年より大阪大学で助教を務め、この度名古屋大学で教育・研究に従事する運びとなりました。

現在、固体材料の表面不安定により自律形成する凹凸パターンに係る研究を推進しています。特に、顕微鏡その場観察実験を基軸に据え、凹凸パターンの形成機構解明と機能材料・デバイスのボトムアップ創製を目指した研究に取り組んでいます。緑豊かなキャンパスで自由闊達な雰囲気のもと教育・研究に従事でき、大変うれしく光栄に存じます。

名古屋大学の教育力・研究力の一層の強化に少しでも貢献できるように努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

新任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
機械システム工学専攻
バイオメカニクス研究グループ

キム・ジョンヒョン 助教



令和3年4月1日付で機械システム工学専攻・バイオメカニクス研究室(松本(健)研)の助教に着任いたしましたキムです。国籍は韓国ですが、東京で生まれて大学学部卒業まで、東京(7年)、鳥取(3年)、韓国・光州(7年)、オーストラリア・シドニー(7年)と3カ国で過ごしました。シドニー大学 Mechanical Engineering (Biomedical)を卒業し、韓国に戻り兵役を終え、東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻で修士・博士号を取りました。卒業後、東京で1年、京都大学ウイルス・再生医科学研究所で2年半ポスドクとして研究を行い、この度名古屋大学にお世話になることになりました。

私はこれまで機械的刺激の付与や力学環境の制御による軟骨・子宮・骨を対象とした細胞分化機能解明に関する幅広い研究を進めてきました。近年は、3次元細胞培養技術を用いた骨細胞・軟骨細胞モデル作製に取り組んでいます。今後も工学的手法を用い、生体組織工学・再生医療工学分野における重要な知見を得ることを目指しています。

名古屋に異動してきて少しずつ馴染んできているところです。まだまだご迷惑をお掛けすることも多々あると思いますが、名古屋大学における教育・研究活動の発展に貢献できるよう、日々精進いたします。今後ともご指導ご鞭撻くださいますよう、よろしくお願いいたします。

新任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
機械システム工学専攻
計算力学研究グループ

崔羿(CUI Yi) 助教



2021年10月1日付で機械システム専攻計算力学グループ松本研究室の助教に着任いたしました崔羿(CUI Yi)と申します。2017年11月にカナダのアルバータ大学工学研究科の博士課程を修了し、博士の学位取得後、2021年9月まで名古屋大学のマイクロ・ナノ機械理工学専攻の巨研究室でJSPS外国人研究員を務めたのち、本学内に異動して参りました。研究について、「非線形材料のトポロジー最適化」であり、特に非線形材料における新たな計算の理論と実行方法の開発に従事しております。本学の自由闊達な学風の下、新たな研究挑戦も、自身も向上できることに喜びを感じています。

出身は中国の上海市で、修士までずっと地元に住んでいました。博士の学生時代を過ごした西カナダで、北アメリカの多民族・多文化を初めて体験しました。2018年、カナダから日本へ参りました。北アメリカと異なり、文化的に近い隣邦の日本で、新しい風土文化を学べることも楽しみにしております。赴任して日も浅く、至らぬ点も多々あることと存じますが、本学の教育研究活動に少しでも貢献できるよう尽力して参ります。東山会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
マイクロ・ナノ機械理工学専攻
知能ロボット学研究グループ

崔羿(CUI Yi) 助教



2020年5月1日付でマイクロ・ナノ機械理工学専攻 知能ロボット学研究グループの助教に着任致しました、竹内大と申します。東山会会員の皆様に着任のご挨拶を申し上げます。私は名古屋大学工学部機械・航空工学科を中退（飛び級による大学院進学のため）後、同大学院マイクロ・ナノシステム工学専攻にて博士前期課程、博士後期課程を修了し、2013年3月に博士（工学）の学位を取得致しました。その後は同大学院にて研究員、特任助教、同大学高等研究院 YLC 特任助教を経まして、現在に至ります。学生時代にはカリフォルニア大学ロサンゼルス校、YLC 特任助教の際にはミシガン大学にてそれぞれ約1年、研究を行っておりました。現在はマイクロマニピュレーション、マイクロファブリケーション技術を基盤と致しまして生体内にて機能する体内埋込型デバイスの研究開発、及び生体組織・臓器の生体外での構築を主な研究として取り組んでおります。微力ではございますが、名古屋大学の教育・研究に貢献できるよう精進して参ります。今後とも東山会の皆様にはご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

昇任挨拶

名古屋大学 大学院工学研究科
機械システム工学専攻
モビリティシステム研究グループ

奥田 裕之 准教授



2021年4月1日付で機械システム工学専攻 機械知能学講座 モビリティシステム研究グループ（鈴木達也先生研究室）の准教授に着任いたしました，奥田裕之と申します。

2007年3月，豊田工業大学 修士課程 先端工学専攻を修了後，名古屋大学大学院工学研究科機械理工学専攻博士後期課程に入学し，現在と同じく鈴木達也先生の研究室に所属いたしました。その後，PD 研究員，名古屋大学グリーンモビリティ研究センター特任助教等を経て，2016年に名古屋大学大学院工学研究科機械理工学専攻助教となり，2021年，同機械システム工学科准教授を拝命いたしました。研究の主な興味は，人と機械の協調に関する研究であり，人のふるまいや意図の観測と工学的な理解（モデル化）を通して，人に寄り添った，人に配慮できる自動車，ロボットの行動計画や制御系の設計論の確立を目指し，研究を進めております。

本学の優秀な学生とともに，研究を通して新たな事を学びながら，刺激を受け，学生とともに成長を感じられる日々を暮らす喜びを感じられるのも，名古屋大学，工学研究科の先生方が醸成されてこられた，自由と探求心のある雰囲気あつてのものと感じております。

授業や，教室会議など，不慣れで右も左もわからぬ様ではございますが，質の高い教育，研究の場の維持，向上に向けて，少しでも多く貢献できるよう，努力してまいります。

皆様どうぞ，温かい目で，ご指導，ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。